

重要貝類毒化対策事業 (要旨)

勢村 均・北沢博夫・村山達朗

1. 毒化モニタリング調査

- 1) 養殖イタヤガイ、ムラサキイガイの毒化傾向を把握するとともに、Dinophysis 属と Protogonyaulax 属の出現量と貝毒力との対応をより詳細に観察しようとした。
- 2) 定点は隠岐島浦郷 (St. 1)、今津 (St. 2)、島根半島河下 (St. 3)、笠浦 (St. 4)、恵曇 (St. 5) の5点とした (St. 5はプランクトン調査のみ)。
- 3) D. fortii は昨年より半月遅れた4月中旬から5月下旬に全定点に出現し、出現量は今年の半数以下であった。
- 4) D. fortii の出現盛期の水温は約15～18.5℃であり、とりわけ15～16℃に昨年と同様集中した。
- 5) D. fortii はst. 5の観察結果では短期間にかなり急激な出現個体数の変動を示した。
- 6) 下痢性貝毒は養殖イタヤガイ、ムラサキイガイとも全点、全期間でNDであった。
- 7) D. fortii の出現盛期が遅れた一要因として、昭和59年1～3月の異常低水温現象により、増殖適温の15～16℃に達するのが遅れたことが考えられた。
- 8) D. fortii の総出現量が今年の半数以下となった一要因は、D. fortii が高密度に含まれた水塊が極沿岸に近づかなかつたためではないかと考えられた。

2. 広域分布調査

- 1) 昭和58年に引き続き、D. fortii を主とする貝毒原因プランクトンの出現時期、移動、季節変化等を知るため昭和59年3月、4月、5月および10月の4回、漁海況予報沿岸定線を利用して調査を行った。
- 2) 水温、塩分については、3、4、5月に沖合の冷水域の影響と考えられる沖に向かっての等温、等塩線の傾斜がみられた。また、異常低温のため、昭和58年より1～3℃程度水温が低かった。
- 3) D. fortii はいずれの月にも出現したが、多く出現したのは4月から5月にかけてであった。また、水平的には極沿岸寄りと極沖合寄りの点に多く出現し、鉛直的には10～30mにかけて多く出現した。最大出現細胞数は935細胞/ℓであった。
- 4) D. fortii の体長/体厚比は、沿岸定点8、9および隠岐島部で1.30～1.37、沿岸定点14～a、および島根半島部で1.40～1.44と、異なっていた。